



浪花土産語

U 5  
5186



浪花土産語

15  
5186

東坡先生集

12

門 95  
號 5186  
卷

天保八酉年二月大坂市諸合

諸役人  
大寺

島田藏書

新島藏書  
三島氏  
三月  
廿五日

一 御城代

役知壹万石

玉造口  
土井大炊頭

一 御定毒

役知之少石

多福口  
土井大炊頭

一 同

先河役大久保為中  
此言多未江左之諸府

米倉丹後守

一 大坂島頭

東河守  
菅沼徹部五

一 同

加島  
小桑吉江守

一 山里北

日  
土井能也守

一 青月屋口

米降保壽守

一 申小屋

一 厚木板

一 百目法目付

一 法藏内  
法藏後役

一 法藏目付

一 塩噌奉行

一 大法寺御座取東西

笠系平大夫 大園吉五郎

曲淵勘次郎

日 井俾右京亮

小笠系佐後守

中川 市右衛門

大塚 市右衛門

西領 市右衛門

小林 市右衛門

山中 市右衛門

仁科 市右衛門

難波田公三

今野九右衛門

浅香傳四郎

野巾字郎

内藤十郎左衛門

東高橋中平二月十九日 礼部 出本丸 儀令人

朝比奈市平次

曲淵 隼人

鎮目 牧太

雨宮次郎右門

久保定治郎

鈴木三郎左門

糟屋与兵衛

神田庄兵衛

富永三郎右門

小笠原鍋三郎

本多十藏

石黒作右門

服部九十郎

河崎 重之次

加藤權十郎

武藤 斗部

小野 鉄五郎

水嶋 十兵衛

間宮 源十郎

高尾 学之丞

松田 市右門

本多 百助

武嶋 主祝

山名 敏三郎

石川 三之丞

石原 城之助

市岡 左兵衛

伊 楚 權次

間宮源助  
小田切主斗

横山良助  
関彦十郎

山菅助三郎  
市岡左兵衛

右余之由由士由小屋屋屋ノなり

少屋之巡見一  
被与子弓を解

冥在急便出立  
心為多中付

一 所御奉行 东

一 同 西

一 川口由松手

一 法破板奉行

石川平十郎

土田清助

石原棟之助

西郡山榎守

堀 伊賀守

本多 大膳

一 法弓由陰奉行

一 法鉄炮奉行

一 法合字奉行

一 法具足奉行

一 法藏奉行

一 法伐友

右之西之由由由法役宅あり

上田 又 多房

法本 清 右 堀

法子 洗 仔 右 堀

石原 後 彦 右 堀

幸田 全 之 郎

上田 又 多房

島田 三 郎 右 堀

比目 田 多 三 郎

根本 昌 右 堀

池田 岩 之 惠

天満舟組与力大塩平八郎事

此者生国回玉の産多々相癒なる者あり初少く時  
より学問武藝を好何卒一文無花の土地に  
て立身せんといふる掛け居たりしかは以て与力株  
譲り有之と越大板より去るおふこははとといふ者  
より知らせむといふ急ぎ上板より魚を心願し事故  
早速相傳ふ及び大塩家の家智藩なく相傳ふ  
町より奉行 高井山崎守勤役中お仕み至り  
紀女より岸和田境備是有岸和田方利有る  
三家より紀女好免子角樹より有る大塩五徳  
より岸和田より勝り免早速事傳ふより同し与力  
より弓削新左より去る雷事此為是なりと飛を責



百獲を切らせ武門を立させまた京都八板申込近  
樹屋法内なりといふ豊田貢といふ女子神職あり  
といふ津より加持祈禱のたし死たる者を生かす  
とて京都より勿備伏見大板近国近在大評判  
ありしがそのいふ平八郎病癒より養生し為京都  
市尾早子藤宿より療治しぬ女子を古く根子事  
聞ふに後全快し付上板救出勸せ交先達より市  
中質物一件許し是有同役と与力方是より  
吟味と遊とといふより更子為是せむ故打捨置しか  
了後大塩子樹りせよりと申さるる付早速引取  
一と通し吟味と遊け日心召連身牙京都に  
古より田貢成召捕り来りしを同役と去る大塩

が何を以て年々物一件乃吟味に京都まで登り召  
捕り来りし候に笑ひし女に水あきしと左相由事子  
様と云ふ同敷京都町人相違ある者と捕り追ひ  
味を搦り多量中々白状法不申一處毎拵向子及  
がらんと一通り皆明あや見之凡そ之真が平  
常に行ひ法交一切支丹宗門相見つて同宗も引入  
り男八人は是あり則召捕り向ひし時真偽辨じ袴  
を差す我を女なりと云ふも弱きは大丈夫女あり  
夫も拵向子も若き神さあくもつとて学力もあらず  
清水を平八郎と云ふ終らぬに大極も学力を笠間を  
と一飛極も侍ありと云ふも困り富田もあらず真  
はつつけに行き八人男も獄門平かゝる大始

末書中、如力も多き事と山椒有感一ひられ故  
六々毎いん事申す来り次第大極も法申し付有之法同  
も如力も拵向子あり拵力も後所へおちぬく拵武  
能信付大極、いん事と違ひうて片腕と力も聞けり  
法老申す方々思ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと  
佛如くも思ふ方々思ふと云ふと云ふと云ふと云ふと  
へ法後替り相成り殊法後、曾根日向守上板下り法  
新に落人、いん事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと  
拵法兼と云ふ事成作つて隠居解り同組と力西  
田法兼と云ふ事助を養子に力も督成り力も  
自多し明し玉陽明が学問を好み力も養子も勤者あり  
つゝその外致道と相違り油乃ぬく拵を何



りし故何れも先年より人々救れり之を考へかたじけなく  
たしき考も情ありくよあき成助も海性ありて以  
市中より智ら仁心成悦ひく雪しき満ちりては  
人も好し既り大事事及びのく三吉屋の成及れ成  
思成存一命を救ふかくまひて平生は悦み  
有る一皆人地所を考へ一保し人々の用ひられず  
んぞりもれも世より人々を救ふもろ一我平りが利と  
助し已後後より高慢悟長は生しり成果は成り  
乃心

附豊田直が撰同より遠く遠く禮者より成れさうし切支丹は法  
を用ひたりしとく今巻部三巻の書これありて二巻より中  
一巻より三巻ありて成りたりとく成りたりとく成りたりとく  
しりかやこれ今く切支丹を行ひし先年より成りたりとく  
法を行ひしとく成りたりとく

發端

天保六<sup>未申</sup>七兩年より杉子世中山作打續五穀高直は  
町人百姓困窮及び金銀を何程も山より有るも余が  
米穀を多く取りて事なれば白米は如者も乞食も  
もたり利命成屋成北穀を知らず困窮多し人方も  
し大板子名ありて成りたりとく成りたりとく成りたりとく  
五米平なること成りたりとく成りたりとく成りたりとく  
杯施行ありたりとく成りたりとく成りたりとく成りたりとく  
横ありたりとく成りたりとく成りたりとく成りたりとく  
ころありたりとく成りたりとく成りたりとく成りたりとく  
と成りたりとく成りたりとく成りたりとく成りたりとく  
理をかきありたりとく成りたりとく成りたりとく成りたりとく

明一何如為子學問を以て外也也子或を名文を武子  
しゝかきりゝも如也大祿をむやむりゝ何は法用を立るる  
也と常々平八郎園東或は子孫を事する形をたしし此れ  
こそ法老申始法役人方迄まひないを故に法役替り事  
成金子也つゝ高田買はるゝと法務及乃をすゝも下し  
と申すは凶作園東も好からぬ事なりと跡部為事町中  
名あるも如き故に施行したゝとふと申付自分も奉行  
まゝありたからし何と申れそと申ふ程の事もなれども市  
中米も過多きも是なまきうう江戸人廻米は外も事  
成娘が市中乃園東も故ふとありし如き奉行たる園  
東は廻米の事しつ事心はまかぬ地をこそ所を奉行有る  
斗ふし候ながら柿の道とる着る一かゝるは申す園

もこれちれもつゝ此事なりと申すは法園と大名と  
り集り日津の如き大極も未成廻りはたまも及ぶと  
をたひら得んあゝ娘が何卒傳居れうも園東人  
を報ひ多く思ふも件格も助うも法奉行は勤し  
かとお問ひもあはれをあやしく心面白からぬ自分  
略此池方の相越し一昨交市中一統難儀は其の  
施行の事なれども金子、子も行毎も其  
事なり何卒金子借同法交りもつゝも商賈も代  
義知せはしめり候と相傳者ありしと申すは娘は端  
と申すは申す田のいゝらなりと元來は傳池義老年水  
野出羽守の法老申交りし法言代引後とて之を京に  
大坂の巡見申すかゝる米法務見分者も二程年も立し

古来は柳下舟付に此を故跡と云ふも其下の子孫代は自  
由に云ふ事なかりしに云ふ事なかりしに云ふ事なかりしに云ふ事  
し海方なりしが京都にて今も此の事出ま  
増地は河津に付せ付られし高向なる事追ふ  
し河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに河津に  
て今も出来相成りし事申すに河津に相成りし事申すに河津に  
勢も此の事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
大橋に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
河内なる事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
於て成成りし事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
河内なる事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに

くは此の事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
を助んと申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
筋も此の事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
去る集り連判状を指し相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
を門中申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
を子も此の事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
し河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
一大事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
と先此の事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
んも此の事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
も此の事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに  
へ此の事申すに河津に相成りし事申すに河津に相成りし事申すに

古米金念中より女子を以て又働き有る世も武士もせん  
何事なりと世に言ふ借故を不問に心得たり早馳  
多き下と云ふ事あり一礼に地獄をまぬか  
せし極楽をまぬかす字成作は是れ故に  
極行の御多し人々知事なきはしう横に二三女子を不  
はせ櫓人を抱き出未揚り治房若くは須代  
入高の上生り天より下村に百姓共へて徳村  
御田に様子張る子より程にけり是れ要用  
多き苦物を指し自多居宅を贈る人少く交  
なり

一京都仙洞御より方極界奉行より二日物上極あり  
りて後役室に候なりと云れり

新は役替りた

多段両奉行日邊甲申巡見一警方居宅迄巡見  
是方例之是より依り同十九日巡見至て休むと日廻り  
力津御助と云ふち極白居宅之右儀相へ申  
奉行休息と聞て平八郎少踊りて祝ひ申す天より  
幸は来り之我ホ居宅より同心と云ふと云ふ大  
院或は延を伏せし兩奉行支度とお伺ひき自多を伺  
ひ一向に打敷しと云ふに野新の御多し味く族以  
た可相と云ふ事あり可なりと云ふ事あり一向り  
押寄り付居ふと云ふの者お來殊り打殺  
そめりし事成成んと十八日より身集り早  
お智成達んものかきりて下り日お  
待りけり



版へ御出り山御書履給馬かせりい自分支配之者悪  
謀を以て一大事及はし事是より西極より  
自分御出り事あり我亦事之危を角の上へ對し  
彼御立せり事あり此方一件一味と成る事あり  
いひし事注進之有威を以て余あり保る事  
早晩後日之惡徒超りて駈馳以下能く考ふ事  
之平八郎事張本より女集りし百性浪人なる事  
のみ思ふ事足らざるも女後供加勢有り  
運つた事取替先がたより請し請し事方々恨みの  
筋も下りたる事あり此方にはなし事あり  
之表へいひし事あり申すに川口方より早に出  
立給ふ事あり是状持せり少者多助孫助二人を

附く関東よりし當時は勘定奉行所那駈河方  
之より一と云ふ事あり大園紀伊守が来西  
久藤は頼と相成り因りあらむ事大切は  
西へ水野越前守へ命せられり

十九日巡見延引之事

叶十七日助三郎御より大場ヶ逆謀相知れりか  
九日巡見より延引より大場ヶ逆謀相知  
る事あり雨奉行延引より相觸り  
て明日十九日巡見を待てて遊事用意あり  
十八日夕八時より明日巡見より人の  
一味より知らせられりか  
事方々用意あり

やせしかりしつらに先評儀決せしは彼是時刻を  
梅津屋打家と云ふをたゞしきりて本行役所  
より十七日助以郎返りて依りて法堂一味姓名あ  
る相承水とて先三郎海助両人を越し一味  
者なる事相知水たる故幸ひ今申當由詰なり  
と申承来共言し助へ申付く二人の夫召捕吟味等  
し法堂子納まり有しとて捕方名付らるる海大  
塩をとり召捕しとてまり大塩子縁ある西田清共夫へ  
申付く事不詳とれし召捕する者下と下りけれは法堂  
十河君下りきとてしきる事なるを根子下りしれは組下  
の者一日一味は多しやとて痛く頼りたるもの足つか  
の御承のみなるれしとて結成しとて海助に助解

と助を少座あし押込次と聞きし根中もさるしかき兩  
人あしおし事不詳とせしと心得て迹出せしゆに捕  
押しとせしかりしとて余三郎も茶も向し押つ  
たる事来打家切殺し濟し助もその海子ゆか  
る事と根荷東根堀堀越しつやとて平八郎  
方へ事し事し然事とて一しき者かき大塩を大にまを  
とてさし助の具延引せしとて事不詳なり及びしが  
見らるる通し一味者あり集り評儀せし所かく  
相承とてさるしとて於縁とて捕自押来つとて首  
途に邪磨心とありし者夜明なるとして相承とて大  
根自ら揚し近きとて者をあし押込しとてさ  
たつ評定敷刻とありしなり





を照らしらふあらぬ金子組と主人はも私辱を請やせ  
けりとのめ一立所の儀も市中金持りかかを打ち上り  
し困窮人百姓へ分をしまりしあふと今か日我選ふ  
とふ作事なまほしむし又いづくに時を渡くとも後の難  
事代也とてまゝに時節事代は是れをあたふ我未  
ま於る上之對一少も振むる節を成し時の役入を時  
代まゝとてはれり今も彼人成れをともは目鏡もみろ  
ふとて事代れが雪事代をなれぬは是れは我も是  
れ一まげく思ひ出さるる事代なるけり傳めしかる  
大後れも我未も兵難儀乃ものそく益也をかくぬを  
ぬぬともはれに戸表もゆかぬの年いひのともはれ  
事行雪をへき事代ありかゝ好くもなまゝ事代上

の目鏡も是なりとあらば我未も月成とらんとてんま  
志のびは天下之民を救ふんと一回も思ひ立からん  
くもぬる空我吹拂く忽ち時天とてはれへきなり傳  
の越るも極なりとてともはれり日我をアとて事代を斗  
らふともはれりといけれも兵三郎申ふ能くは考あ  
つて後榮を思ひしとてはれり大後れも事代と  
替り我未も交死せり二交死ぬべきといはれなし傳  
謀なからん名と後世傳へん忍はる所とて申せり兵  
三郎も傳のあつて中へはれりともはれり打志目  
れり是れ一もはれり後れも見せり海一刀切伏  
てからり打笑ひかふ乃も是れ人毎と一味まかへ  
しともはれり書を引出さるるともはれり評議も加し

とあるはむしおもひし兵三郎あはれききむさし切る  
き者子あし移ると偏子鼓臺の信をいり傳西し矣  
えお曲りりかむりく殺されしを殘念あり

大塩平八郎火を揚ぐ形勢  
押中江一

相平八郎と宇木兵三郎が死闘を庭に梅木を掛  
首途血をうりぬれしと伝ひて相闘に火を  
近づく婦方よりせぬ勢一同に押あし近道  
欠廻り鉄炮を打立を擡立せし火の子公方より  
りて寺天満より男女馳初ち方ぬり大塩と建國  
寺は深空より打ちけなき早を行取ぬりわきま  
へしそ時打果もんと深空より大塩を殺せぬ

少燈考之に燃る故分や来りし傳もゆき来りし一  
島子駐付しと伝代友池田岩と西あり奉行のあつた  
来りしはしにせぬふりぬしゆは子守あしし来りし  
はりしはしにせぬふりぬしゆは子守あしし来りし  
天満堂を燈拂て来りしと伝代友池田岩と西あり奉行のあつた  
へ押掛る一とあしなはしと伝代友池田岩と西あり奉行のあつた  
奉行のあつたと伝代友池田岩と西あり奉行のあつた  
りしはしにせぬふりぬしゆは子守あしし来りし  
来りしはしにせぬふりぬしゆは子守あしし来りし  
三郎なむしおもひし兵三郎あはれききむさし切る  
れききむしおもひし兵三郎あはれききむさし切る  
て只一人城にすし馳付のふりぬしゆは子守あしし来りし

於ては板代土井と知取居へ今氣をいひ山夜を言ひ  
下りお來りぬ。流く上橋もまた道に馳來り。南天は  
字に大石同を打込りて神主下りてふたふた命  
まうけり。社橋も流り石像の神体を拵中し  
る中より人刀を思ひまじは是神力を加護なりん  
とちちく信心の神智も手より川端へ押出さる例  
通り横行しに西飛つりて去りて行車未だり  
早く中より大石同は多岐を海しく通りかほれを  
捕車をおき七徳をもちて橋を力拵りて我  
時方をも金銀おもひぬちやとけり。ちちる子  
りく押行もまた中より欲し迷ふりて安ら未だり  
子命からりのがるもちりり

天神橋を切為りての成防り事

はて神橋もも南北へ掛りて百三拾五金行りは通り天  
神一筋西界へ通り天王寺下迄通つり凡て里足  
りての界續けに神橋を海りて南に越せり。と界  
舟橋もも道に車を行を海りて南に越せり。と界  
氣をももみたり。は橋なるも早速里のりてふもす  
あはれも先神橋を切りて通れを海りてふもす  
雪徒りて敷敷時凡百人斗りて橋を海りてふもす  
も橋ももあはれもかみけきもあは川を西へ押行け  
り。なす道にの多限者も大根をゆき調とつふ乾物もあ  
り。は必し一筋橋のちり世にの凡字もは去りて本願寺宮  
方折りて中より引を頼りて西に同

打止しと田五郎愛名を法にさす信二水全く左にまゝ  
乃天那橋渡難れを難波橋より廻り内抄人難  
波橋より橋杭を切らんせしをえり西信共抄に  
鉄炮を打掛く急に橋を渡越たる故に者も大  
相を子思候に中矢を此か道に南に引り一味者  
駆集りて凡そ百人毎揚ぐおるはけり以時大  
井五郎一平八郎抄り此二子より此都会三子  
とたうそ五郎より上野米平一統懐拂りんと押行  
大橋父子二子も今橋迄探りて防池一統言難橋  
三井尖林比田より板多假央のあす集りたる所な  
れども思ふたうとて皆々喜ぶ事なきも女中の不代焼し  
ゆへいよ火特つよく追つたの押集りて谷野を焼

中より足より車馬を行す海橋の近き事なり  
海城のよあゝも防王の海自衛力あり

海部海玉造与力を加勢  
頼る事

さす逆位難波橋を渡りて三子に成り教甚しけ  
れども車行所は後車防に程も管束なりと田五郎  
自方組の与力も多しなれども海玉造与力曰ふ  
ゆへに勝多しと抱術も博しと多しと且此は海  
城代へ海取のふち取頭なるも古き事遠近支  
取下にさすを以てさすも但馬守なる申す遠近  
属する事多し信無り事なり若海城の  
ころの事海城へ還りたる時より海玉造とて



こそあつたのならば役をたぬ者也とて銀を叩  
 けし子もあつた銀を引出ししはまた鉄槍を  
 車に押せかかてけり車廻りし車四より押  
 廻りしは物なき命からし海ありり又河内を  
 り娘をちねん守りし出しし君大かたす見舞  
 子未しを捕へ殺せしは号すは海ありりがお  
 そり付歩行し御事御解ありしは海ありり  
 内はありしありし海を捨りし海ありり海ありり  
 りかよしは海ありり海ありり海ありり海ありり  
 もそ海ありり海ありり海ありり海ありり海ありり  
 所を通りしは海ありり海ありり海ありり海ありり海ありり

かの店子有合たる 襦袢をわたりしは 柿を喰ひしは 八尋  
 も我家を焼くもはれぬ 馳走ししは 火難重のかる  
 心しと 田の仕廻りたる 柿を喰ひしは 下五丁の 残り  
 喰ふる 路をたつ 方筒を打込あり 火を二面子成て 田子  
 有合ふ者 命限りし 迎生おそりし 山中 雲ありしは  
 取寄りし かるる 居持 傳へし 徳道具 成りし 成りし  
 ありしは ありしは ありしは 大筒 打込あり 迎山ありしは  
 をかけし 海ありしは 殺せしは 平八郎 今橋  
 筒内 ありしは 筒 打込ありしは ありしは 代 ありしは 大  
 筒子 筒ありしは 死 ありしは 金子 ありしは ありしは ありしは  
 ありしは ありしは ありしは ありしは ありしは ありしは  
 川筒 ありしは ありしは ありしは ありしは ありしは ありしは

とて田あはれは進つて梯の邊を歩かぬ成りて是  
能者馬をうけて雲徒を打つて一両寺行ふは越法  
越代一河届け有る事一とてまゝくは越代へ出有  
所よりまた去る處有るは越法のは伴定あつて居  
今よりまゝくは有る越法有るかは然へく思召尚  
又か勢とては誓田勤兵衛米倉掉次郎招務治郎  
石川亮兵衛四人より任付く事あり四人の者も  
袴して腰子出ん事一時を毎毎つて四人の者も  
美込を附多り也任有るに誓田勤兵衛任せ居る  
あて其の織造も大方筒を固めると水甲甲月と事  
しつゝ防かき水も被撥ふらむり除抜有る変と務  
利も考へてある種もあつてはへる再い河同通く仕て不

存まると申すは遠海なるは孫傳あり三人の者も  
尋ねし事か否か向意と申すはしつゝ時遠海  
番何らうとて四人の者も本結し助と結る事合是先  
昔の氣を付く血縁とてやうはしつゝ四人の河海と  
押へ決つて河守の御下はしつゝ出行する治世とて  
心掛け給ふこと感せぬ事ありりり

河海河海防さし御京橋玉造日等  
河海河海防さし御京橋玉造日等

東甲寺行路部殿者殿殿り子力七人同公三令加  
勢子多しやれは越法は越法近くか来来し越法は注  
進付大目京橋玉造日等相をうり内外處を  
よはしつゝ出入を定め今言事を定め出入を

平常は海内にもある所の公人出入り船れども通行  
し海門のまじき改め通しけり海内を乃方こそ船れ  
まぬを度方處不所を通るなり信臣多き者を何れ  
も主人は船れをよ通しまた海内北出の大船既百  
騎官家来何れも下れよと出ひあり内より外へお  
れものよ下れよを色も七切もなげしを通るぬ  
なり海内由方處同心一氣く代り勤る海本  
丸天智を屋下し海金をきり城下し海金を行  
日也三四人泊る船れを海金を行かむる之  
は海金へ近むる西に海代安金持らぬ物  
り近むる海東海金へ物もな方板海金  
あり金銀障りありとぬる京都へあるものも多き者

あり海金を行役も四人を内島まつておひ金高  
月勤る之もあるありよつて海金へよき行相候  
大島を舟をり刻舟の方ち舟の下に口を海金  
國あり方舟に組取あり相候嚴重之候を行  
曲則甲斐守殿を距る海金代を候し候し  
々等海金杉平遠江守海金國備土橋外より  
三行子弓務炮長柄と折るを並居あり一  
大舟を附し舟相りかき泉あり田村國部  
内膳玉殿を海金を後し常く少一舟を三ツ子分  
て立られし目録ありりる舟損し土井海金  
土橋柳外に同されり海金百騎海金屋後  
南より海金十中より海金海金海金



持りし京橋口顔の中より京橋口を米津俣持りし  
辰日海船有孫りしはか因方十海城代屋母は海語  
之京橋筋路河門と玉造まの海都あり橋をか  
けくは米蔵海其新屋あり土は海船前を通可  
野野及下り橋をわけける平常曲者入通行は  
花燈まをまを難路ありんしと早速右河門玉  
造方の海系十四五人同めをを海が舟入り  
皆系系ありし力隠名二田力三男抄方力以之者  
伝舟らまを同ありし者不し京橋へま丁まはぬ  
揚ふしは流徒ありぬ後退る者系を以るは名  
捕揚し西の方を雙ふ立並んたり也記者見ぬ  
まは捕をぬ敷をぬは大橋一味者と銀は揚り

程々出島を船中使はりて米津をのき思ひ燈灯を懐中  
せし夫多くは水ありし中坊まを大力曲者あり  
五つ入るまをぬ探りけり又中まを探りしは  
通しは者なり所を思ひ行ふ力振りしは  
おし通しはかほかを固免の玉造方より力智を箱  
と掛し通しはまをぬとまをぬ向ふはみ道  
橋舟はは節柄若しはかほか通しははかま固め  
のほあはれまをぬ矢をらせしは筒口を向く打  
たりしはぬぬはま行か系系ありしは下つしは箱  
けくは通しはけりな系系思ひ力ま市由のしは樹けり  
へ金銀に付たり城方より力まぬはま及平常中  
雪し思ひ力まをぬはまをぬやまはつしは城

後を思ふ力ゆへ何れとの事下らんともおなほりけり  
ゆへ唯今口福を有しとたりし深林口こそ深炮を以  
て折あえく今も後當運者押来らるる勿ち追ひ  
おめんとかなづとてさへ待かけしとて南の方へくまそ足  
りし

大自京橋五送口柳をさすも此上布粁方五河内を清なる申す深  
柳深川若之三日月一敷さすりちりちり子も三四人秘事を  
しえく心構をせ柳をさすも此上布粁何れも此上深川方より  
おきよる早きるさすり深川代深川定由深川代の前は清  
たつ神のさすり深川を柳をさすも此上布粁方五河内

海部殿人数押おの事一京橋方より  
思ふ事行る事防自取らる  
素奉行のさすり送方より力七人日夕三千人なり遠近殿  
以用へ畑佐柳助を深川矢よりかき海部殿深川

未方申候しおのいとし被是時刻らつりも雪しとら  
んと打おんとさるいしが深川役書の防たも為さるれ  
も京橋口より力を和んと存らるれが子及深川代へ向  
ひおのせりて延刻のいびんとしと京橋口より力に深川  
のさすりしおのた米倉申候る春深川張女侍身より  
りか深川下知あつりおのさすり出かたさすり一けは深川  
海部を存せしれりしが所へ百目附中川申候  
門方深川方郎らつり米倉申候るさすり下知及び深川  
早に後重つり越か勢たつり申されりさすり  
京橋より力深川深川方へ神深川深川清水裡兵衛  
の三人より日夕三千人なり深川防方を且て京橋  
山越る海部馬下家より送らるる日夕三千人なり

りやうと申す方迄毒三た川浅ぬゆり五二兩人五送事十  
くう向い敏徒とた心同と用ゐたるはし無方より七大臣同  
田意有也然るやと山師智もこれより借入けり玉  
送よ力冬も新きる於毎日筒田心き三由中筒  
持る結はた遠慮後海子同之志り無くも左同  
同意とあらまはた海刻のたや一さ下を急た  
百のせえたるも下はる借同仕らんそ廣生能二郎  
むらうと打系一とん母冬りしが早と毎ちもどる百員筒  
そ幾少回ふ少即二人の連れ来る都合と方七人同ふ  
即三三二人畑佐種とゆき遠慮後陣代とそ是陸  
四人召連はたは後電を押あて二月十九日午下刻ふ  
りやうの増ぬと申すもあはく大臣同音すをばはく

りふきやくとゆらんと申すぬまはたはななるなり

山師智後出馬并々京橋方

は後電防自配事

相も送よ力同ふ保防後子隨の出るゆり京  
橋よ力入替りて雪ら防さの用意之は法徒電少  
方石垣高き築立そ下り首田沼主属所夢んは  
勤る弟も居る處なる地面より口より山林赤  
り中京橋の通行に往還する毎山林をまき曲り  
くそ京師車行不門ありこれ電徒押来る道  
筋ありそありて天橋橋とそ是も百餘余も平居  
是より与力勤由通りしむしが天師橋を西へ難地  
橋を越しと西より大臣同を放つて押来るゆりは石

下北林を切控へ空地とて其の処より一歩はくま方使  
あり相存初るる平野里より西より一とこありて欠  
行しに自らそつ半斗り先なるけより方心同を打く黒煙  
の中より無をむくめり大勢進み来る同心佐尾清次  
郎因崎友兵衛掃屋助三山崎宗四郎真名子進ん  
く舌より白き草のいと掛へく打立る程子誠徳書か難  
人数多討れありの事集る雲雀浪人百姓あれりこ  
勢にあれ比所より返りしより然る事之雲雀を打退  
治く為西里寺行場伊賀守居る事多討来る事しゆ  
山城守居る送方勝治郎掃屋郎居る兵衛三人の事  
力より心を多く伊賀守居る加勢力より生えきと御事  
形りまより二日子年く雲雀を退行ぬふ級高麗

揚筋まで賊徒偽しを立退し大心同を打つけさはる  
きより伊賀守居る事多討来る馬勢を多討来るをく立  
けれを鞠亭手たあり道後へさして居る事多力同  
心何事も是を白く場居る誠徳浪絶子當りし  
心得より少く進みさめし遠る居る相佐秋  
くぬちうけくは奉行あり立ぬふたりおのく日  
く海國澤を白く玉也天下に為子撰りぬくきたた  
を振舞も多ありけり心同は是をけり心同  
先をえろへく打てかるる事伊賀守居るその事多  
り打多し鉄砲を打つけく瓦里を打て退行ぬ  
とに勝ち印は所より立抜りぬく又替りぬ打立  
く押行し伊賀守居る事多くまより罪多き事

多怪我人多く出来て却て狼も其妻からん只て徒  
堂を西へ押後へ川ぬ流りて打面より一守二守  
三守をたして進行けり

淡路守の境筋の合合の事

相山城守は互を境筋を設け守りし中より境筋は押行  
しにせしむる式下平より進んで城徒も寺行は出に  
来りしは山守より寺行勢を以て殺しし事と屯  
しし侍中めり進り行しに故なる事なり同心先を  
持て寺守は城徒も進んで侍中めりなる所なれば  
大分岡を車に傳子軍口を向ておんとは流れも為方を  
り打山は少岡と云し雨霧の如くは飛来する故車を  
あつらひなり故に城徒は押し進めんとせし事も自

由なるに恩は四郎と力為助は下知しし侍中  
のぬらぬ定あつたゆを玉城徒は取之を起して皆  
ら流し置けり又方より筒音を身より流し火勢を流  
く家この様なる音瓦の流る音より流し天地も山守  
かと思はれし流る大分岡の軍口ありし事より向たり  
しやまを火流共とて之より流し置けり又大分岡を  
んと置けり口廿年祠よりや色分ありし居るゆへ  
坂中流りし由本寺為助進出するに火流夫を殺ら  
しりし事をも聖に放せんしせし時為助をたより立  
同心は好らつて居ししが弓を以て軒下より天水桶を  
少指より流しし事なり城徒少岡城に流りし由を流  
らんとしや火流共を切て放んとす事ありし由は為助

勢馬をくつぎし助をねしきまひとてなまけしといはれ  
し助一心に彼火術者をおんと好し居身まひまひは爲  
助ともよ好しひくとも天の痛く優まなまの筒先心  
えなけれも筒先を天の痛くわけく彼織を打  
らんとお救せし痛く痛く織徒も何たる候  
りしかともはひさし織徒もえぬわく結も助の陳  
笠のみの端を打振ありは時結も助の打おれ玉  
火術者か左の傳のつかひを打振き車に振子附録  
く織徒の舞を打振おれも向く振子倒し  
ひりまひもはひさしおむす玉舞ふりまひも織徒た  
はりもまひも右に左に振子散れりおのく一回おれ  
をうけし進行するに織徒もあつたりて場の中

紛入終りし束を具矢いぬ古火術者の例より見たり  
は者も彦根浪人梅田源右つと者申由平山と志  
用二重の少袖下着も黄八丈紺縮緬と申し先は足  
袋をもたれ黒四足折し羽織茶柄細身と大小を申し魚  
子心得る出ある体も下は見之古少袖下着も束を  
條の筆といふ者源右の首を有る槍に母身は持せ  
ける平場も此道具長刀の外去器数多持て  
迎たりりり書末も若しは此道もあはれ

両奉行市中巡見しと土井屋に法届  
けとて法届とゆらりし事

梅田伊賀守居西へ進行ゆへに法修屋丁境箇の織徒  
散れし中於たると見之大小を傳授二箇拾ひる事



考修行し今も御書も怠らば御子も教多申しは者も私  
志んもは白を有り防く處し見り鉄槍もささ木柵  
ゆて決しとさ人十のはしとさ言を吐く梅すも大  
夫未より玉送のき海層海夜宅層木板下は屋母に  
アうく重なる野田りし河内の國續き之控もは所  
り大岡を打つのはしちるゆ一家中もあゆ女もさるを  
遠見し出さるる人勢集む松子なりは海城の一方  
玉送向ふ杉山とさ高た松林ありは所へ大岡を  
三四飛伏す方控へ城廻り大岡を仕掛けしは城  
方より一目より打放しとさしとさなはれしとさ牛田意  
なり又松よひく毎乃用意とさ海新倉より運び  
山は海を北東の海門よりし海具足を行る御

し海借具足を持たし夜討し未らんと命くその仕  
交をいとしけりが是を尻や控し何の御侍もすりり  
の或里余り木小の當り保科陣にす弱層領分  
は長光寺村とさ所あるとさ外丹指消をささるる  
此所を襲しんとし海鉄槍を行海は洗伊右の日記召  
連物さひくうとさあさかれけり

守口宿白牛考たつとさ牛并の宮根志ら  
計畧の事

お十九の夜何の御侍もたつとさりるか廿一日早朝の東  
北より白の力御子城徒七すう由守はとさは延を益  
く伏見を行加初遠は書後へ海頼下りく國を  
り子登り城のせせとさるる急をこれとさ海城代弄



海方は海流の流るる海流天の雲をよみたり一覽たりと  
しして海流の流るる海流の當り事の内之目けりなり  
の遠近を知らるる海流の當り事の内之目けりなり  
者なる水も何れも流るる海流の當り事の内之目けりなり  
は海流の流るる海流の當り事の内之目けりなり  
只今も海流の流るる海流の當り事の内之目けりなり  
山岡峠南に今國山とわすれ上り嶽小に田波と境山  
また山と東やうなり山は山と海流の當り事の内之目けりなり  
越して橋をよみ海流の當り事の内之目けりなり  
五の早も海流の流るる海流の當り事の内之目けりなり  
方ありし海流の流るる海流の當り事の内之目けりなり  
は角も海流の流るる海流の當り事の内之目けりなり

るるの流るる海流の當り事の内之目けりなり  
ありし海流の流るる海流の當り事の内之目けりなり  
なぬふ田と行所をよみ海流の當り事の内之目けりなり  
り海流の流るる海流の當り事の内之目けりなり  
當り事の内之目けりなり海流の流るる海流の當り事の内之目けりなり  
宿へ行く海流の流るる海流の當り事の内之目けりなり  
日岡組坂本館と助本多海流の當り事の内之目けりなり  
は海流の流るる海流の當り事の内之目けりなり  
そありし海流の流るる海流の當り事の内之目けりなり  
んんわらわら急にけり海流の當り事の内之目けりなり  
るるの流るる海流の當り事の内之目けりなり

本町に体子ありに古園を人数を司る処に役人よきかくり及  
子付き子に致したる蓋早子に付日よき比出せり左探  
し候しは是なきもさうく介者云出せりやうし申の  
へ是も中坊せしうき一しを建念なり比修立か  
くも是御子毒りし。同条のこかき管筋に白井孝  
たのしき者方極よ方ならぬ熱意ゆひは交違謀存  
たり一方は天狗ならんる。成案。飯合加初知り政ら  
れし。せし。於政めり。富事。下。を。来。上  
彦。と。立。内。と。刻。者。方。つ。が。定。一。方。見。り。  
家。内。去。人。も。人。な。能。見。廻。り。近。来。あ。う。見。く  
く。下。あ。り。飯。合。一。高。藤。子。西。掛。子。飯。櫃。の。所。に。た  
る。飯。櫃。也。一。あ。り。し。つ。う。ま。あ。り。し。方。振。う。近。所。に



と振子を召出せし。召仕下女も人集り居り。召捕来  
り。責問。一。家。内。の。者。共。を。此。處。村。下。鳴。裏。自。ら  
川。致。越。り。う。家。方。へ。引。ふ。し。し。女。共。に。け。れ。を。上。池  
上。首。あ。め。方。外。是。し。さ。ぬ。の。子。柄。子。な。ら。ぬ。を。ま。た。兩  
人。思。案。を。存。つ。れ。も。さ。な。り。吹。田。村。に。し。所。に。大。橋。平  
八。郎。が。伯。父。も。多。招。吉。磨。も。申。辨。言。有。是。を。捕  
く。れ。す。べ。し。又。吹。田。村。へ。相。見。る。多。招。が。申。を。有。卷  
市。間。に。り。な。り。を。掛。け。比。処。に。あ。り。し。は。一。向  
音。も。さ。る。な。り。を。掛。け。き。し。件。間。を。人。あ。て。是。へ。出  
上。り。し。れ。ば。し。い。ふ。を。あ。り。し。方。に。申。し。け。し。を。志  
す。も。後。を。き。り。し。と。見。へ。く。神。も。も。得。を。か。へ。兩  
の。も。血。を。漂。す。込。方。八。田。高。橋。の。兩。人。を。向。ひ。て



思ひし所へ召捕せし引連ては彼所へ引出せし後  
あつはありけぬとぞと答けし事なつて又四五  
日おち坂へ相替へありて平常申けりて大坂日事  
と申内もを早速大坂まで飯を費し西掛けし水  
て天海をさしそむ哉と申し申ゆへに何ゆへにやと事か前  
廣く知れぬと存ぬか何と前も知れぬと申すも  
下へゆへに申せぬ有もぬ飯申付るなりやと  
乃知るるの事もいと大坂志りかなはは忘るるはと金  
の云付て出行あり平常と何事と吐く事な  
しは時斗り古く次第申付たに相命り大坂火  
事如所法有る付早に飯を費し西掛けし下へ  
出る者多き西へ下りて追ひ追ひ

し大坂の大坂まで伏見まで行可ふと朝所へ者を家  
為致るに到る事なつても大坂まで下りぬ者も立寄り  
こゝも存られぬ事なつても何事をも知らぬ事なつても  
召捕せし事と申し申ゆへに何ゆへにやと事か前  
廣く知れぬと存ぬか何と前も知れぬと申すも  
下へゆへに申せぬ有もぬ飯申付るなりやと  
乃知るるの事もいと大坂志りかなはは忘るるはと金  
の云付て出行あり平常と何事と吐く事な  
しは時斗り古く次第申付たに相命り大坂火  
事如所法有る付早に飯を費し西掛けし下へ  
出る者多き西へ下りて追ひ追ひ



法多あり米五百俵取出し或百五拾俵を積むる  
 者其之法取としそ及坂城其居小屋を積むる  
 或る五千俵を人出難所と無頼子因ひたりすれ  
 刻分七百寅と刻迄東西及法子於百南北七百  
 六於百の敷を方八千或百回於七軒建夫とす  
 八郎父子と云然及子と法存有やいかも其  
 法あり召捕その是あり法廣る金子の下  
 と法縮なり如一味者追所より相知生来り  
 故先を難證とたりそ天由橋少後南法は板  
 少を立く半時とありそ是あり入法未丹後人  
 を附く積むるはやとありそ送坂城其居も  
 右同半法板少を相ある

附居て寄る和田の難年へ竹の皮色を其積むる名余りあり  
 竹皮代金八百ありそ是より法希を積むるは  
 の事より大なる井との下とあり玉送遠海ありそ  
 送高直し両方入敷無頼子腐於石余りともせしが  
 送たる事なり

緘徒一味者追々召捕り事

- |       |        |
|-------|--------|
| 白井孝次郎 | 川合茂三郎  |
| 西村利三郎 | 志村周治   |
| 同義三郎  | 市村治郎兵衛 |
| 梶園傳七  | 横山文次郎  |
| 日原右門  | 藤平新三郎  |
| 御井与四郎 | 伊藤原吉   |
| 宮津茂三郎 | 川嶋市彦   |

澤井原三郎

中尺喜内

田中新次郎

十哲相火事と聞て河内弓削村に御民四村利三郎  
一味に百姓引連て大板へ来りしが保子の相違せし  
や物静子引取たる之利三郎を乱妨しからり居り  
し由是利三郎と云ふ引取たるあり利三郎身たかりし  
右に者共も浪人亦も士百姓等も京都伏見近  
左近の隣國より召捕ち板へ引取らば味とて入牢  
之者角方橋父子大井五郎行濁知れり雪あ  
る夜に女を隠居するの爪守ゆせ百兩中を難儀  
ありしが捕手をもとめ何かせしと虚言を言て空  
く立歸る三月初旬大板より及法八里斗と云れ

有原原那之山天寺の坐す當くあはき者籠居  
るよし毎分平八郎が少事ならんと知らせあるの事行不  
きたるも与力同心夜中より原那山に女を隠れ松明を照  
らし坐す門を先子立ちし坐すに登りしかと怪しきを見  
當りて是も空言なりと云ふべく立歸り持て息を尽  
ししと存ぬ搜せしと云ふ事ありて女自ら裁りもあし  
て終又不之觸る召捕るもあき者之廣美金也  
此より女もは存ぬもとられそと思ふ事裁なし  
言はれおし高野山よりかくまふ事ありて  
言傳十人忍ひの者を入ぬる事ありて  
しき事ありて女子高橋の女より甲三郎被田  
海原郎の三人一夜とめを送り出さる事ありて

中隠し居るは又赤吉野山十五里奥十津川廿四  
村にありし大塔宮に逃味方せしゆに村残る本  
海ゆじ有る罪人のかき来りしゆかくまひかとも  
百姓に海味方と投ちぬかかの廿四村に志ある  
り年こそめつれりや向ひぬそ伴後子老陰を送り  
津に南よりいふ及びは決む人相重成ゆそ津  
つ存ぬ衆一けれと文字行樹えぬ是服前市  
中子三十日余隠れ居る者之形れあり及び諸人  
夜を焚れ時節柄難保及ひしが方坂市中大  
塩を日るく云をのそ人もなく却る役をとり  
いひ大塩久を云を所とせり平八郎根もすけ  
右巻之勤めしゆ仁心行つて能里あり人々

手元子隠れしゆを知らぬは平八郎役人なりと云ふ  
安田岡生 壬午

十九日礼放し諸罪人働き破水及び本里下り  
持たる錢を拵り途行を早戻後辺五右衛門  
捕ま津玉送る所を一部子金足金は一兩日  
処へ急昇奉行あり引候す

橋本忠兵衛 壬午

般若村より赤吉野の久主よりお八年日赤平八郎赤子  
あるは後いさかあるのありしゆ入るありまたりつ  
と船く山とみせしが申年十月は二件ありり  
平八郎申す當時赤敷高承より海に後子  
存るなく役人其の形からる百平の及由申聞



我母友諸人難儀を助けし為右と企てり候と云ふ當  
十八日早朝平八郎一味は  
此諸人みお人足あさし船ハツ時以ハ軒家まで  
引取籠り力本以同書お拾く少船より有る平  
八郎お十八人乗込書川中へ漂ひ日暮り及ハ大  
工作兵衛お人足お者元の子くけ力兵衛  
伊丹表にみ懸しゆり自害させぬれ指  
形されぬ平八郎大工作兵衛方へ一宿しつる  
女も馬方郎か忍び有伊丹に冬りて是病を付  
ハ平八郎存を知らぬ京教へ冬り知る方へ  
忍びり時節を待しと隠し居り我京里を  
行佐橋長門守殿の子年召捕りてち板へ送

りあり力兵衛娘三孫年拾りて申十月廿二日  
平八郎を産する後血の乃ちたぬゆりておひ  
以抱せらるるまゝに平八郎召捕りぬ京教へ  
みりく身をばしめ大坂へ細心診りて送りぬ  
へいぬらまゝ三日未子病死たり或女乃馬方郎  
まゝ返迎村お探りて女房を尋りて乳をまた  
り

橋本力兵衛  
五十女

今川馬方郎  
或女

平八郎召仕

里津  
或女

橋本助  
白娘  
三孫  
五十女

平八郎妻

橋本助召仕

三  
おひ

つね

船中より平八郎父子評議を自宗はるる中より  
を評議か評議の四舟より上り立別れし及  
評議事なるといふ事有る無事申すゆへに評議事  
味とて入平八郎

大工作無事

此者母も色あ平八郎方へ有分仕りみまを存方入  
仕作事不相働とて去り作事なるといふ事  
り内平八郎御事相持せし三寸三分長  
サ六尺三寸指在サ三寸四分三分の持筒  
本日掘り出さるる裏板掘り出さるる

平八郎申す事此金中両年書林申付て  
市中施行はるる中より中より細達被り  
も急にお来申すは津と津津近き者へ来た金  
壹朱のほしを施行せしるる明り人足り  
少申す事此立十九日云々時々冬より冬  
はるる書林申付て此金中両年書林申付て  
飯を厚山掘り出さるる子へ自宗はるる  
軍に相持る仕度百姓大勢集り何れも合仕  
らぬ内平八郎はあはれ申す高道より下り相  
成りやうはあはれ申す人足り申す事  
打殺やんといふ程に是れ申す人足り相  
持を指かり申す事打破り働きしは後平

八郎一集と申す事日多し陸より居宅に海に渡りて  
いづれ相成りや後と云ふ一向存せぬ上より味  
入牢平なり

板山三平の事

此者先年少庵の事これ下り村拂と相成り當所  
多ありなり村方より能くとも二千九百なり河  
村の村幸方つせ後より大塩方へも亦古家易  
成らざる企て一歩致し其身を無事私病及び思  
を焼の事なり古家家の金銀を其身に持ちて  
途中平八郎に附添りて同に陸に及行人を味  
方より進め引込の事幸き少庵平八郎に迎去  
たるを捕り引廻し之獄門

鯨江村近至下近

漁師

金助

老松男 作兵衛

大塩下男 七十八

日産取 五千七

大塩下男 七

大塩下男 三三平

七助

古六人者伏見奉行方より召捕り大坂に送る

東祖より力瀬田濟助

十九日形意の境不我老海より遠く河内若口村  
より来りしに寝れり一ト是より歩行かき百姓家  
より飯を呉れりといふ事の内は樂しき人なり  
是れ是れなりといふ飯櫃を出し見ると茶碗

子をなむ位と有かふの孝叙に仰きし事ありしと  
お行が下と有古妻飯を喰かる事し人衆あま  
あまよふ事ゆへ例もあつて大少を両りし事ありし  
おとく志半山禁恩地越中事奉りしが病か七八  
の百姓追来る根子山を越ん事つづぬく事か  
し刀を捕まんとし惜しやあつけん片蔭ある木子  
首をかけた後死に

同心後迎良左衛門が事

お好後良子珠炮放たせつけし行自由事しし例  
く河内の玉志半那弓刺續き田中村子至りし自  
害母んと首を我がらふ事かんと母もや京力叶は  
し見く首の後子ぬきりて獲を病して切らる根子

奴錯者何つう切事らる由け。

土井ち物及後銀知の者

高橋九右衛門

河内古口三馬村

小川甲三郎

大和玉横澤郷民

杉田濬三郎

古三人者お好後紀お高植山子遊行防舎を頼  
てかく事し日ぬし事成頼めとも昔とも知かひお容易事人をか  
くお左に一救めし退中これけりともお道ぬ事し  
ひせ免く事とあつてお日村の者も働は百姓をりし  
林山あを以方たゆし罪の煙んはるるも中者登し

とあるし回村百姓十人を縛りつけられたる一旦逃れぬ者四罪を依  
く於三入獄門二

曰心彦司御左二乃事一

礼坊後寺より方捕たり吟味有之ぬ罪子を伏せ  
と平八郎を神に如く致し狂来の如く天下は改道  
と事とねりし句りりる

近藤権多郎と事

礼放後三日ある深夜柄もあき刀の刃をこつるを隠し  
持方浦組自分居宅横跡へ来たり切腹に逆徒と  
か一箇と死すはゆえ

法弓曰心井之方也郎と事

河邊郡中山寺門外より旅宿を泊りし夜に捕虜

太郎重茂を第に引之田五兵衛へ快を告し是は伏の  
又言子を負苦き事子を養ひて自に殺すも死にせと  
田一と事何れは平八郎と聞られ多ゆへ命と親と  
もなす一何事と首と事成約し多り未故此  
交平八郎企ある一件扱あき越たつたといふ事  
羅子行はれし何と事申さす力なきは立<sup>ま</sup>た<sup>ま</sup>有り  
之は腹認めけり若くは自依師近はりゆへ事多し  
見事平八郎の八人者回心心の口續きこぬあり  
田中勘右門に法形分取が不勝自付願之田五  
兵衛かへ引取すけり

と力大西共五郎と事

此者平八郎捕の續きこれあり去申事奉行大久保

備前守の勤役中天王寺の宗白山海雲と云ふ一心寺住職  
企の筋は与五郎取返せしむつて申行はる相  
弟与五郎と召連られみたり申宗相相相相相  
其後健忘と如く申すは此の家を焼きて退き  
相子と申す一時的にたき給と物に續き申す申す  
れかたく思ひ其の筋は此の件善く助因及を  
申す此の兵庫西の区間測り大小と申す此を  
以思ひ行し見習らる召捕りしは此の二味  
何らぬと申す申す申す之方板引る

大塩平八郎父子の事

及申河内の平野と云ふ方板引陣と云ふ平野焼村  
と云ふ田幸村の傳りぬ唯今と云井大炊頭殿海軍

と云生方と百姓のむす大板引板の相由掛  
三平屋五郎兵衛といふ者又新津を海軍者の方へ  
寺公方おしふが三月五日代と云所は  
内此の打寄吐りは女中と云米と云ひ  
三思おしふ只今申す勤め三平屋と云  
と申が二月末と云事かきと云らるる  
また是らぬ事と云有と云一日廿二日  
替り高直の時節一井流と云替りは  
子と云はたつと割り相子と云有と云  
と申れしと云三平屋と云平八郎父子  
相遠と云御と云と云土井と云の  
左と門下と云と云中御術師範はる  
因野幸左門

外八人者へ召捕へき旨をばりしその用をいかり榎狭  
の所と安しぬ短き持を持才輕子お立その面許  
見ある者なれを西与力内山彦三郎を招き早速  
向ふ四人召連て来りしかたをかくの越申す一曰押解  
け。以時三月廿七日早朝古くおまつ油掛け男裏  
男信濃田へ四罷越は所へ會ふ五郎兵衛を呼よ  
せし候へるぬ。に以者大塩か生國お意の者ま  
既手与力株明し郎も申せし程中平八郎  
と金子越通おつたせし事もあつ有之ぬ女房も  
折こお入心たり女郎いふ事しゆと申す女平八郎も  
相成者と少く續き合ふぬが旁一方ならぬお意  
りは及れ候し郎用ひし籍もはにばやま澤下けあり

と召捕へし白状せしゆ一早速思ひ候ふと成る友子大塩と  
礼婚後おみはしやむを居る誰も少附者へりし  
と子者者おわつた子追子のあつたをわたりし味と若  
を退く旅さ勢極細細退き思ひせしうち板を立退大  
和河内の境間峠より行て百姓お鶴吉と名者お殺し候  
と山を越たる松子お見せしあつたち板に立床り  
とこのみはしや方りし由を作りし事一裏の力お徳おの程  
子細相所よりしと角あり三方おまはしと三百おなる座し  
とありは及れ思ひびひありし事一うまを廻りしその才を  
お家へ渡すもあつた通し切子を持再會し物もあらんは  
ありし程とされしと山彦三郎五郎兵衛と向く平八  
義大塩父子哉かんとし事一の明玉おぬを召捕へる





八郎かゝあらばさういふ道も途も無し鉄炮といふは  
於て途も残れ夜之あり今の才も成て此近防も共  
詮ふ一やく之をさす種かきと鳴るはかた内も海  
へありといふ事なり其れ何れらんさういふ物音もさういふ  
と途も無しといふ一曰り力成ち打破らんといふ  
は進一と海城代勘定方図むら度と云者あり  
ソ切あるを打ちさし押せし見まを田圃に於て助  
う死骸を隠し平八郎を度毎の四方へ槍筒をさす  
た中一は矢指を握切つて体もさす人か入せしか  
火成放して刀逆も持て二力さしこれさすも人ぬや  
三力の咽をさす二力さし引ぬええ進ん人を目  
魚を投せし自かろうつぶさたり火を一面に燃之

り黒煙立昇る人折まるといふはさるの奴を消ん  
とはやと火勢盛く両男奉行と糸付来り防者も追  
こ来り津火を結く二人死骸を内山彦彦郎が見  
せけれを握つて焼爛さす津水も自宮さす  
く平八郎自らけし見ゆる平八郎火背の方へ焼く更  
く津水も津水も倒れ影を道に休ます様  
と一通り書付たり是を横引かき見ると大  
敵ちのり出さぬ乃ち形も平八郎及観水  
印とたり兩人も製刺さす神之内山馬を見り相  
違なりとの中平八郎も津水も死骸をか馬籠り  
大橋平八郎回移り死骸をれをか二平八郎及  
もいひしと云く此が津水も奉行へ送りけり

三上りぬあひん

五郎兵衛

五振文

つね

四振文

か

三十一文

き

十一文

治兵衛

二十八文

伊助

二十四文

下男 佐兵衛

八振文

寅

十三文

忠兵衛

四十八文

三

三十一文

つ

二十三文

よ

十八文

有る兵衛と送り此外おき人も此男の急な返答に子  
また五郎兵衛も張本人方極をかまくまの儀を

海が味とこれ有る男丁内は役人を被あつて閑事ありと  
あつて五人組年寄白子屋と一郎召捕れ奉行不  
ま引まけ。お後田村火防の極多力るの付寄持  
九三抄人斗りまを乃をもり。駕籠三挺子付隊奉行  
不へけ。有越は世代は届下りお。昨日はか  
し大極子奉行未初れ多れも奉行不る此一件は  
是之さてみはしや。まあつあはるの。申之けを被  
大極のまを極あある。恩とさる。下り。命よりけ。か  
く。ま。何成。羅子。行れ。決。根。子。と  
云。あま。子。あり

松本林をまら

此者流は男一医師の將孫子と。と。大極引取。子。被

五しや此者防範中法皮を奪取供子給込何卒お  
馬すす記を伺ひ奉行を討取んとし掛け多きと見ゆら  
此年揚子之刀呂捕り十四文子之似合ぬ働をものちり

吉貝水郎左門

此者中中麻子有しが俾大西与年郎孫善助而  
人共大塩内子子有しがあ人を西奉行へ返たり  
去り市中放火し以初おけり時刻をなむる者  
とあち水を逐来しり同根を孫りて呂捕をけり

一浪百救

玉造口遠友但馬守組与力組支配  
友本 眞 助

古き町奉行跡部山城守組下与力方塩梅助巻子平八郎兩  
人形右使黨者共市中放火が婿子乃と郎山城守馬子

進 一 浪 炮 打 立 回 勢 々 抽 入 織 徒 内 附 入 大 筒 右 振 以 巾  
織 徒 矢 倉 子 討 取 り 以 付 忽 為 死 乃 以 以 後 殺 群 之 御  
さしり水子依り別段は慶美とてと被下

一金五拾兩

本 多 為 助

日新 一 郎 坂 本 結 之 助 中 合 織 徒 之 寫 進 入 附 入 旗 炮 打 込 二 命  
被 擄 子 以 相 働 之 以 付 正 慶 美 之 以 被 下 矣

一金三拾兩

山 崎 孫 四 郎

日新 一 郎 坂 本 結 之 助 中 合 織 徒 之 寫 進 入 附 入 旗 炮 打 込 二 命  
被 擄 子 以 相 働 之 以 付 正 慶 美 之 以 被 下 矣

一金五拾兩

小 林 与 太 五 郎

日新 一 郎 坂 本 結 之 助 中 合 織 徒 之 寫 進 入 附 入 旗 炮 打 込 二 命  
被 擄 子 以 相 働 之 以 付 正 慶 美 之 以 被 下 矣

口組より移り候なり

高橋金左衛門

米倉高橋高橋組より三郎又

浅羽集久

古法磨美より下段

一金五拾兩

五造口組より力退番并時及之者於人の下

一金三兩

古月組より口郎之者於人の下

一金三兩

高橋組より退番并時及之者於人の下

一浪於放の或放迄

組より退番高橋組退番番組より或人の下

一浪三枚

高橋組より口郎之者於人の下

一金或百足

高橋組より口郎之者於人の下

一金三百足

川崎高橋組より口郎之者於人の下

一金三百足

法具足奉行組より口郎之者於人の下

一金三百足

法具足代於人の下

一金三百足

小楊頭より人の下

一金三百足

杖突三より人の下

一金或百足

少楊頭より人の下

一金或百足

高橋指より人の下

一浪於放

三思より人の下  
尾山出方又右左門

日漸より高橋奉行より高橋代より口郎之者於人の下  
未の所より口郎之者於人の下

遠藤但馬守殿教る為に回られたる後、昔高橋奉行より  
法具足より高橋奉行より口郎之者於人の下、  
金子お金に付りし由法具足より口郎之者於人の下、  
金子お金に付りし由法具足より口郎之者於人の下、

り祖より坂本鶴之助一科あると津の刀被下を殊と  
 力りて刀狼等と多き一信付き白鞘之銀之被下出雲  
 孫四郎一紋付上下千金子と此残り内心より千金子と  
 下と

礼婦と者為る事

大塩父子塩漬と江戸表は向ひて之礫を行きな  
 り徒黨をかきり者召捕と相成者とも大西与五郎  
 始於合百七以外自殺存死なり大保八両年六月  
 廿七日江戸表に海進達

此部少体者祖掛り

物楚持治郎

吉見雪三郎

右兩人子同物と表に下り

十九日友礼後打捨る決道具

左子急る

一百目長筒 三挺 一百目短筒 二挺

一五貫目木筒 一挺

右車子とせとて此世に掛り乃者身一と名を道に

一鎧櫃 或荷 一長持 二棹 一火茶草籠 松

一錢 或抄物 一草籠 六ツ 一草袋玉茶入 八ツ

一長刀 四挺 一拾目筒 廿挺 一大鼓 三ツ

一竹刀 五於木 一捧 百五於木 一具足櫃 三ツ

一大小 廿三樽 一火車羽織 廿二枚 一陣笠 二ツ八

内丸腰懐才なり 一甲 三和寺

(北目筒) 九挺 一房球包五ツ 一兩掛七為  
 松目筒 或提 一横帷子 拾  
是八田清太郎由川  
 八千太郎交關する棄  
 あり  
 手掛り者 積百文の包  
 是を神巻と云ふは 十丁

一軍具 三ツ

古く品と云れし場子打捨

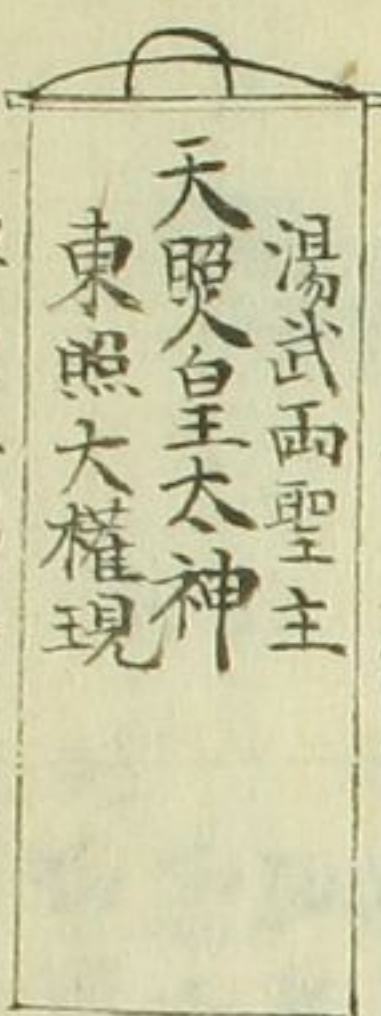
道具なり

澄修号境節有合行つゝと云れし場子の捨多し火術及  
 具火草箱燭を相佐於し四月の事同し思家の  
 井戸打込せり其外然の事し大小長坂四ツ橋辺  
 四條の事と云行不(事)あり河内近江家より依  
 中との大小なと進(事)あり思家の相白井若方(事)橋  
 本乃兵衛三は五郎兵衛方極家来女と云は評定不

法役へ上げたつゝ近江近江一味の族は之陳(事)有  
 法に法吟味(事)之為(事)相成(事)有力(事)来(事)主人(事)法吟味  
 申(事)法吟(事)為(事)之(事)後(事)急(事)交(事)法(事)此(事)之(事)親(事)元(事)法(事)後(事)相(事)成(事)中  
 法掛り  
 法代衣 根本若右衛門

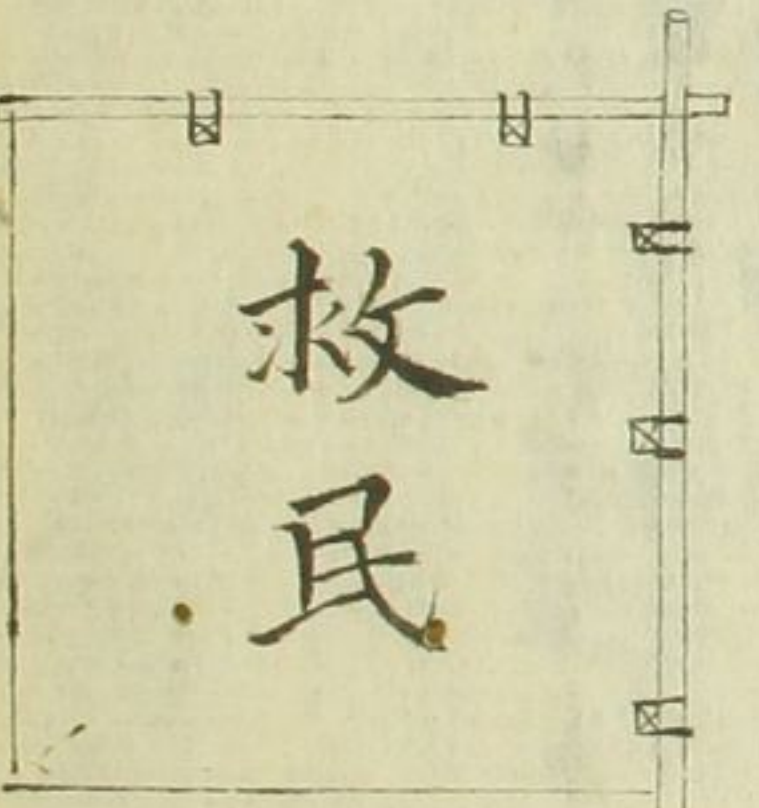
籬式本

長サ三丈三寸五分  
 巾 二丈二寸五分



但布木綿(事)女子墨(事)五(事)書

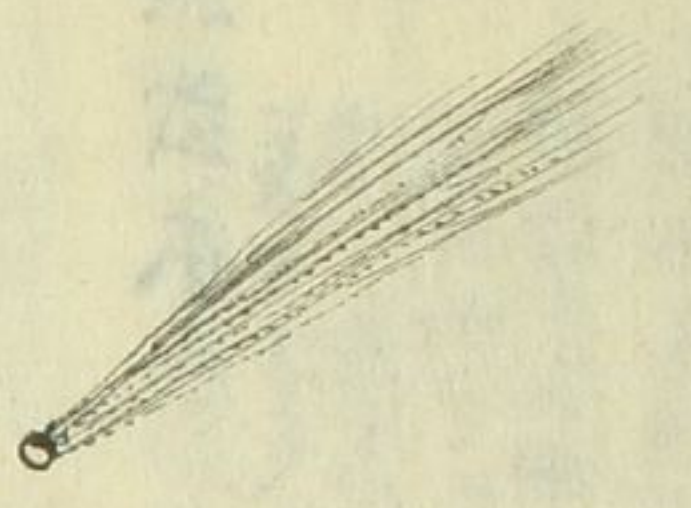
袖下四十八



四半 白木綿地  
 丈三尺六寸  
 巾 二丈八寸  
 餘 八畧ス

安政五年八月初旬ヨリ東西ニ星現ス  
東ノ星ハ曉ニ現ス西ノ星ハ太陽没ニシ  
タガツテ現ス但シ漸ニ南ノ方ニヨル  
九月中旬初ヨリ不見

○安政五年年諸國豊作ニ但シ  
國所ニ依テ出水作物流矢ス



○安政五年年七月六日十三代將軍家  
家定公御他界八月八日御發シ

同日十八日東叡山ニ御入棺

温恭院殿ト奉稱  
拾四代家茂公  
日將軍宣下

千秋万歳  
御大老職當時 井伊掃部頭様

安政見聞志有  
安政風聞集有

同年三月九日夜西九御炎上  
御本九御炎上  
西九御炎上  
嘉永三戌年八月八日暮六ツ時々八拾余ヶ處ニ落雷  
同六丑年六月三日亞米利加船浦賀江入ル江府騷動

同年同月家慶公御他界慎徳院殿

安政二卯年十月二日夜四ツ時江戸近在大地震廿余ヶ處出火人々死ス  
同三年辰ノ八月廿五日夜四ツ時々江戸近在大風雨洪家多々死能  
同四巳年二月江戸近在共風邪流行亞米利加十月廿日登城ス  
同五年年春ヨリ亞米利加魯西亞英吉利登城号中住未

旅宿

愛宕下真福寺 九段下靈學所  
西應寺 午春取拂ニ相成ル

(大震同夜 七度程  
引續 度ニ震)

(海中ノ火石如ク空中ニ燃  
引續 引續 引續)

同五年初夏分雨天多暑暑中日新甚冷七月下旬八月下旬ヨリ人  
多ク死在ノ月百拾多々人ト云病急  
附平外 桂ニ法ハ分候様ノ草方注觸重知  
桂枝 乾姜 益智 各等分其外其外山岩厥様ノ施板ニ

防法防法と薬法有傳か、慕人死者一ヶ月、中拾四、何レモ四日と考  
 考外、身知人者、其数不可量、依之市中、は、海、板、米、物、下、置、市  
 中、呪、祈、禱、事、櫻、シ、家、毎、ハ、ハ、子、の、急、赤、紙、板、苗、唐、辛、中  
 を、門、に、控、え、は、巨、市、中、一、統、後、是、を、す

古  
 仁賀保  
 金七郎

梅  
 子  
 八  
 親  
 分  
 三  
 郎  
 左  
 門

清正公子形

八  
 親  
 分  
 三  
 郎  
 左  
 門

此外、法、神、社、に、九、香、米、品、甚  
 多、存、者、於、立、六、板、張、也、  
 置、九、月、朔、旬、三、至、止、ム



加  
 野  
 左  
 門  
 加  
 野  
 右  
 門  
 加  
 野  
 三  
 郎  
 左  
 門  
 加  
 野  
 三  
 郎  
 右  
 門  
 加  
 野  
 三  
 郎  
 左  
 門  
 加  
 野  
 三  
 郎  
 右  
 門



